

## 第33回 武蔵野文学賞「高校生部門」 土岐善麿短歌賞

選考委員 林あまり、寺井龍哉、河路由佳、横山未来子

### ■ 林あまり

今年度も、たくさんのフレッシュな作品に出会えました。

一首単独の最優秀賞、中村巴月さん「牛乳に浸した食パンみたいだな白いブラウス三年目の冬」は、オフホワイトと言ったらよいでしょうか、落ち着いた白が目には広がります。

着続けて何度も洗った三年目のブラウスと、高校生活とが重なって、味わい深い一首になりました。

優秀賞の佐野晃太さん「見上げてでも教室みたい吊り革が息を揃えて相槌を打つ」は、吊り革がまるで生き物のようで不気味。その不気味さは、従順な生徒のイメージと呼応します。

優秀賞、土屋沙音さん「百年後も思い出したい『サイゼリヤ 由来』を友とググった今日を」は、この瞬間を宝物として、永久冷凍保存する一首。

そしてもう一人の優秀賞、峯田陽仁さん。「そのへんにただよっているファの音に二人乗りして地獄へ行こう」は、私、イチオシです。ファという不穏な音を選んだセンスが絶妙。イヤな感じがいいのです。

このイヤな感じこそが、高校生のフレッシュな歌だと言えるでしょう。

佳作の河野紗姫さんのタケノコご飯の歌は、マンガの一場面のようにくっきりと目に浮かびます。こちらも笑ってしまいますね。

同じく佳作の矢野麟太郎さんの酒瓶の歌は、酒瓶がまるで人間のように歓声を聴いているようにも読めるところが面白くて、私から推薦いたしました。

連作の部・最優秀賞、青山澄香さん「見上げれば夏」、「ファミレスの紙ナプキンを畳む癖正しさばかり選んでしまう」の一首に顕著な、いまの自分への、これじゃいけないという焦り。大人の私にもぐっと来ました。

優秀賞、小森瑞さん「今世は」、ことばが尖っていて良いですね！シーラカンスもカマキリも素敵。私は「歯ブラシをきみの名前で呼んでみる 私の歯です、どうか削って」が心に残りました。これは恋の歌ですよ。

優秀賞、安田湖夏さん「遊覧船のくちづけ」、クラシックではあるけれど、場面が絵本のページのように美しい。「かなしくてかなしくなくてさかさまの花束のかたちのワンピース」など、本当に絵本にしたい一首です。

## ■ 寺井龍哉

### 一首単独の部

#### 最優秀賞

- ・牛乳に浸した食パンみたいだな白いブラウス三年目の冬

毎日毎日、制服として身につけてきたブラウスなのでしょう。もちろん愛着はあるけれど、三年目の冬、さすがに真っ白ではなく、少し色も変わってしまった。その感慨が端的に伝わってきます。休日の午前中、部屋で寝そべって、壁に吊るしたブラウスを見あげてぼーっとしている、そんな静かなひとときを想像してみました。

#### 優秀賞

- ・百年後も思い出したい「サイゼリヤ 由来」を友とググった今日を

ふと気になったことは、すぐに何でもスマホで検索できる。適当に言葉を打ち込んで、表示された検索画面をさっと眺めて、「なるほど」と思って、友人たちと少ししゃべって、少し笑う。そのくり返しが、日常の時間を埋めてゆく。でも、こういう楽しい時間がいつまでも続かないこともわかっている。「ググる」動作の瞬間性と、「百年後」という巨大な時間感覚の対比が見事でした。

- ・そのへんにただよっているファの音に二人乗りして地獄へ行こう

ドレミの音階を上がってゆくときに、何となく不安な感じがするのが「ファ」の音。いつも日常のあちこちに漂っている不安な気持ちをつかまえて、燃料に変えてすつとぼしてみたい…そんな願望を詠んだ歌と解釈してみました。友情の歌とも恋の歌とも読めそうですが、向かい風に吹かれる二人の表情が見えてきます。「ファ」の音感などをめぐって、選考で大いに盛り上がった一首でした。

#### 佳作

- ・弟がわたしの背をぬきホクホクと笑ってかき込むタケノコご飯

「ホクホクと」は、私の背丈を抜いた弟の嬉しさでもあり、また「タケノコご飯」をかき込むときの擬態的な表現でもある。悔しいような気もするし、でも、弟が嬉しそうにしているのも嫌ではない気もするし、という、きょうだい間の微妙な感情の動きが読みどころでした。

- ・曇り空今ならなにか始められるそんな気がして絵の具を出した

快晴の青空や満天の星空を見て「今なら何か始められる」と思うのは、月並みな発想。むしろ、明るい天気にも、むしろ気分が落ち込んでしまうこともあるはず。だからこそ、「曇り空」に「今なら何か始められる」と思うというこの歌は、屈折を含みつつ、でも真実味のあ

ることとして迫ってきました。

- ・ マーカー跡ミミズ母の名古ぼけた英和辞典から父を読み取る

「母の名」にまつわる言葉に、ゆらゆらと不安定な筆跡でマーカーが引かれていたのでしょうか。かつて「父」が使っていた英和辞典を開いて、私の知らない両親の関係を盗み見る…そんな秘密めいた時間を想像しました。少し言葉が窮屈に感じられるのが惜しいです。

- ・ 公園のベンチ下には酒瓶あり集団下校の歓声を聞く

ベンチの下の酒瓶に、過ぎ去った酔客たちの姿を思い浮かべつつ、集団下校の子どもたちの歓声を耳にとらえる。大人たちの猥雑な時間と、幼い子どもたちの無邪気を奇妙に一首のうちに共存させて、複雑な手ざわりのある歌になりました。

- ・ 中秋の名月すすきはないけれど好きです君には言えないけれど

上句が序詞のように「好きです」を導いて、やや風情には欠ける秋の情景のなかで、それでも君への思いを伝えようと葛藤する様子をうたっている一首だと思います。言葉遊びのように展開してゆく部分が長いのは照れ隠しと見て、あまり深刻な恋の懊悩とは読まないほうがよいでしょうか。

## 連作の部

### 最優秀賞

- ・ 見上げれば夏

「間奏の終わりを待たずイヤホンを外した午後に風が通った」、「手のひらが机に貼りつく そのたびに別のことばを選びなおした」など、一瞬の微妙な心の動き、身体感覚の揺れを、丁寧にとらえる表現が心に残りました。「二分後に発車と光る電光板 遅れる自由に憧れている」など、はじめに状況を描写し、その後で感情や一般論を短くまとめる、という展開の歌が多く、その点はやや平板な印象もありましたが、「ノートには書かないことが増えてきた まちがいじゃない沈黙もある」など、後半の格言的な部分に胸を打つものもあり、力量に安定感が認められました。

### 優秀賞

- ・ 今世は

奇想に満ちた一連。「肋骨の凹凸部分をなぞりつつここは黒鍵ここは白鍵」は、生々しく、危うい身体感覚に惹かれる。「冷房によって寝床は北極だ 白い氷河のシーツ、おやすみ」の比喩の極端さに、一首の言葉に飲み込まれるような心地よさを覚える。「整列で改まってるきみの背をスッとやって鮮魚に変えた朝」は、発想の斬新さもさることながら、下句の「ス

ッとやって鮮／魚に変えた朝」の不可思議な句またがり癖になる。

・遊覧船のくちづけ

一首目の「想像の雪の降る街 あなたのせいでかわっちゃったって言いたいな」は、現実には雪の降っていない街で、もし雪が降ったら…という光景をありありと思い浮かべつつ、現実とは異なる「あなた」への関係を夢想する、現実と幻想が幾重にもかさなっている。「かなしくてかなしくなくてさかさまの花束のかたちのワンピース」のような比喩の巧みさ、そして末尾の「くちづけのために遊覧船ふたつちかづいてゆきはなれていった」の、壮大さと繊細さを兼備し、虚無的な荘厳をたたえた歌のたたずまいは見事でした。歌数が十首と少ないのは、やや残念。

## ■ 河路由佳

一首単独の部

最優秀賞

・牛乳に浸した食パンみたいだな白いブラウス三年目の冬 中村巴月

制服のブラウスを想像しました。高校3年生も終わりに近づいた冬（応募は夏でしたが、先取りの設定が成功しています）、洗濯を繰り返した白いブラウスの、繊維の劣化した様子が、身になじんでくる柔らかさでもあって、慕わしく、どこか甘やかでもある。散文では表現の難しいブラウスの様子とそれに対する思いが、上の句の「牛乳に浸した食パンみたい」で見事に表現されています。結句の「三年目の冬」があるから、高校卒業前の感慨だということが伝わる点、巧みな一首だと思います。つぶやくような上の句の文体にもリアリティがあり、高校卒業前の感慨というテーマは、高校生の短歌ならではの魅力です。

優秀賞

・百年後も思い出したい「サイゼリヤ 由来」を友とググった今日を 土屋沙音

友人との楽しい時間、おしゃべりして笑いあった、そのことにかけての価値があつて、何を話したかは重要ではないということは、だれにも思い当たると思います。後になって気づくこともあるわけですが、この作品では、「今日」、自覚しました。特別な「今日」だったのかもしれませんが。ちょっとお洒落で価格帯が手頃で高校生同士でも入りやすいレストランとして「サイゼリヤ」というチェーン店の固有名詞は利いています。店名の由来ははっきりしないようで、手元のスマホで検索したくなるのもわかります。深い意味はなく、「友

とググった」ことが大事。その瞬間を、遠い未来まで留めたいという気持ち。「百年後」という表現は粗いですが、十代の作品らしい瑞々しさと勢いが感じられます。

・見上げて教室みたい吊り革が息を揃えて相槌を打つ 佐野晃太

教室という空間に圧迫感を覚えたのでしょうか。電車に乗ってみたものの今一つ解放感を感じられず、期待を込めて見上げてみたけれど、行儀よく等間隔に並んだ吊り革が電車の揺れにあわせて息を揃えて相槌を打つかのように一斉に揺れているのが教室の生徒たちのようで、電車の中も教室みたいだ、と思った。「ても」という仮定の逆説から、「見上げたら」何かが変わるか、と思ったのだけれど、「見上げてても」そうはいかなかったという失望感が滲みます。第三句から下の句にかけて「吊り革」を擬人化した比喩が鮮やかです。

・そのへんにただよっているファの音に二人乗りして地獄へ行こう 峯田陽仁

「ファの音」は音階の四番目。ドから一音ずつ高くなり、ミのあとに半音高いファがきて音階が成り立つ大事な音ですが、「ファ」から始まったり、「ファ」で終わったりする曲はあまりありません。音楽の流れる街角にはそこそこに「ファ」が漂っている。浮遊感のある「ファ」の音にひょいと乗って、逃げ出したいという気分でしょう。心許せる友人と二人で。目指す先は「地獄」。明るく美しい場所でも作品は成立したと思えますが、「地獄」に読者を立ち止まらせる力があります。背景に、現在地よりましだと思えるほどの絶望感があるのか、あるいは、何か罪悪感があるのか。読者の想像に任されていますが、上の句のふわっとした表現から衝撃的な結句への緩急が印象的です。

佳作

・弟がわたしの背をぬきホクホクと笑ってかき込むタケノコご飯 河野紗姫

描かれている内容はわかりやすく、思春期に背丈が延びて姉である「わたし」の背丈を超えて見下ろすようになった。その伸び盛りの弟が機嫌よく春の香りのタケノコご飯をかき込んで食べている光景を描写しています。「ホクホク」は無造作のようで炊き立ての香りたつようなタケノコご飯の感じをよく伝えていますが、春、すくすく伸びるものの代表格のタケノコと伸び盛りの弟とのとりあわせは屈託のない明るさに満ちていて、そこが本作の魅力です。一点、「背をぬき」という表現は推敲の余地があると思います。「背」には背中の意味もあり（背丈を区別するときは「背(せい)」）、介護や洋裁のことばに「背ぬき」「背をぬく」という慣用表現があります。

・曇り空今ならなにか始められるそんな気がして絵の具を出した 植草結良

「今なら何か始められる」という気分がこの一首の核でしょう。積極的な行動力の表れです。その「今」はいつか。「曇り空」の今だと言っています。青空は日差しが明るすぎ、雨空は湿度が高すぎるのに比べて、曇り空は湿度も日差しもちょうどよく、無理なく一歩が踏み出せそうだということが理解されます。それで、どんな一歩を踏み出すかという「絵の具を出した」。白い紙に自分の選んだ色で何かを描こうというのです。実際に絵を描くとは限らず、自分らしい新たな一歩を踏み出すことの比喩としても解釈できます。

・マーカー跡ミミズ母の名古ぼけた英和辞典から父を読み取る 柳原萌々子

初句と第二句の三つの名詞は、続きを詠むと「古ぼけた英和辞典から父を読み取る」ための手がかりだとわかります。「父」は不在、もう会えないのかもしれませんが。その父の若いころの英和辞典にマーカーで印をつけた跡があるのは想像しやすく、恋人か若妻の「母の名」が書きつけてあったというのも父の思いを偲ばせて魅力的です。問題は「ミミズ」。あれこれ考えた挙句、素直に、釣りの餌かどうか、父を偲ばせる干からびた「ミミズ」が挟まっていたと読んでみたものの何かひっかかり、忘れ難い印象を残します。

・公園のベンチ下には酒瓶あり集団下校の歓声を聞く 矢野麟太郎

作中主体は午後の公園にいるのでしょう。ベンチの下には昨夜、誰かが飲んだらしい酒瓶が無造作に放置されていて、近所の小学校から集団下校の子どもたちの歓声が聞こえてくる。ベンチ下の酒瓶から想像されるのは鬱屈した中高年の姿。歓声からは屈託のない子供たちの姿が見えるようです。作中主体は高校生。自分にとって過去の年代の明るさと同時にふと垣間見えた将来の年代の暗さ。心境を語ることばを用いず、事実をとりあわせるだけで、上の句と下の句の対比に作中主体の心のたゆたいが伝わる巧みな作品です。

・中秋の名月すすきはいいけれど好きです君には言えないけれど 中村巴月

短歌のリズム、調べが心地よく、愛唱性のある作品です。上の句と下の句の「ないけれど」のリフレイン、「中秋、すすき、好き、です」と子音の「S」、「すすきは」「君には」の「は」の繰り返し、全体のリズムを心地よいものにしています。内容はというと、下の句に尽きるわけですが、あたかも「言えない」の「ない」をひきだす序詞のように上の句があって秋の季節感を添えているところ、短歌ならではの楽しみが味わえます。

## 連作の部

### 最優秀賞

・見上げれば夏 青山澄香

説明的にならずゆるやかにつながりまとまっている十五首の構成力、一首一首の完成度の高さで、突出していました。題名の「見上げれば夏」は中ほどの「ページには湿気が移る読めぬまま気配のように見上げれば夏」からとられています。目の前の本を前に読んだ人の気配を、かすかな湿気を感じつつ、読みなずんで見上げたら夏空だった。静かに「湿気」や「気配」を感じつつ夏空の下にいる「わたし（作中主体）」に存在感があります。

作品は粒ぞろいで選ぶのに迷いますが、一首目の「風のない昼に干されたシャツの肩 誰かに触れてほしかった気配」、以下「耳慣れぬアナウンスにも呼ばれてる気がして止まる知らない駅で」「二分後に発車と光る電光板 遅れる自由に憧れている」「ファミレスの紙ナプキンを畳む癖 正しさばかり選んでしまう」「ノートには書かないことが増えてきたまちがいじゃない沈黙もある」「時刻表見てるふりして心では今じゃないバス待っているかも」といった作品に惹かれました。これまで出会った人の数の何倍もの人数の人びとにこれから出会う高校生。一首目の干されたシャツ、知らない駅のアナウンス、心の中で待っている今じゃないバス、これから出会うであろう人の気配を予感しているようです。正しい時刻どおりの日常をはみだしたい思いを呑み込んで、書かずに沈黙することが増えてきたのは、成長の証にほかなりません。作品はどれも端正で、過不足なくまとめられており、作者のたくましい力量を思わせます。

### 優秀賞

・今世は 小森瑞

個性的でおもしろく、才能きらめく十五首より成る連作です。一首目の「血管の枝分かれした回数が生まれ変わった回数らしい」は内容の信憑性はありませんが、私たちの血管が毛細血管にいたるまで夥しく枝分かれしているほどの回数、私たちは生まれ変わっているのだ、ということを提示していて、これが連作の導入になっています。連作の最後は「複眼で見た人間はどうですか・・・今世は蠅で良かったですね。」と、さまざまに生まれ変わる中で今蠅の姿の主体が、複眼で見た光景がこの作品群だったのかと思わせて締めくくられます。この二首にはさまれて、人間と人間ではない生物、または生物でもないものとの境界が曖昧になる不思議な作品世界が展開されます。よい作品はたくさんありますが、「肋骨の凹凸部分をなぞりつつここは黒鍵ここは白鍵」「整列で改まってるきみの背をスッとやって鮮魚に変えた朝」、「歯ブラシをきみの名前と呼んでみる 私の歯です、どうか削って」「目覚めればカマキリみたいな妹が兄の寝首をかこうとしてる」に注目しました。人の肋骨にピア

ノの鍵盤を重ね、朝礼の整列で前に立っている生徒の背中に手を伸ばし「スッと」縦に降ろしたときの、鮮魚を下したように錯覚する描写が鮮やかです。三首目の歯ブラシを君の名前で呼んで歯を磨くのは、ちょっと異様な気持ち悪さに面白みあがり、四首目の妹をカマキリに見立てて「雌」としての潜在能力におびえる作品には奇妙なリアリティがあります。

・遊覧船のくちづけ 安田湖夏

淡い恋の気分の漂う十首の連作です。注目したのは「ミルクチョコレートを包む銀紙のさわっていない場所がやぶける」「かなしくてかなしくなくてさかさまの花束のかたちのワンピース」です。一首目。さわっていないところが、なぜかやぶける、思いがけないところの破綻は、この世のさまざまな事象の比喩としても読めると思います。「チョコレート」ではなく「ミルクチョコレート」にしたことで、板チョコが想像しやすくなりました。二首目の上の句の相反する内容を意図的に隣接させる表現は「撞着語法=オクシモロン」と呼ばれるレトリックです。この作品では「かなしい」「いや、かなしくない」と立て続けに言うことばは矛盾していますが、気分は無理なく伝わります。「さかさまの花束のかたち」というのは、Aラインのワンピースを想像すれば合点がいきます。センスの光る表現です。

全体にセンスの良さは確かですが、「調べ」に疑問のある作品が多いです。自由律かと思いましたが、どの歌もほぼ三十一拍におさまっています。たとえば、一首目は「想像の／雪の降る街／あなたのせい／でかわっちゃった／って言いたいな」、六首目は「くちびると／くちびるで鶏／のハートを／転がしてあな／たを聴いていた」、九首目は「吐く息と／同じしろさは／臍にあり／わたしだけ知っ／ている静寂」という具合で、句またがりが多用されているようです。句またがりには効果を発揮することがありますが、この連作の場合、マイナスになっていると思います。よい作品をたくさん読むことで、定型でも自由律でも、さらに洗練された調べを持つ作品が生まれるのではないのでしょうか。

■ 横山未来子

一首単独の部

最優秀賞

・牛乳に浸した食パンみたいだな白いブラウス三年目の冬

白いと思える食パンも、真っ白な牛乳に浸すと生成色がかって見える。それを「三年目のブラウス」の色にたとえた比喩が秀逸で、映像として鮮明に目に浮かぶ。やさしい色合いに、高校三年間の歴史が感じられる。

## 優秀賞

- ・百年後も思い出したい「サイゼリヤ 由来」を友とググった今日を

友達となにげないことをネット検索している場面。検索しているワードの具体性も生きている。「百年後も思い出したい」と表現したことで、仲の良い友達との関係性が見えるとともに、高校生の頃にこういうことがあったなあと懐古する未来の自分からの視点があり、青春の一回生を感じる。

- ・見上げて教室みたい吊り革が息を揃えて相槌を打つ

整然と並んでいる吊り革を、教室の中の自分たちのようだと感じたのだろう。かすかなアイロニーがにじむ歌。電車の揺れとともに揺れる吊り革を、「息を揃えて相槌をうつ」と表現したことで、アニメーションのような不思議な味わいが生まれている。

- ・そのへんにただよっているファの音に二人乗りして地獄へ行こう

謎めいたところが魅力の歌。「ファの音」には、微妙でふわっとした印象がある。そんなファの音のような気分二人で乗って「地獄へ行こう」という呼びかけに、若者らしい感覚がある。

## 佳作

- ・弟がわたしの背をぬきホクホクと笑ってかき込むタケノコご飯

「ホクホク」が、「わたし」の背丈を抜いてよろこんでいる弟の様子と、あつあつの「タケノコご飯」をかき込む様子の両方にかかっているのが楽しい。弟と、ぐんぐん伸びるタケノコのイメージも重なる。弟への愛情を感じるあたたかい一首。

- ・曇り空今ならなにか始められるそんな気がして絵の具を出した

晴れでも雨でもないニュートラルな状態だからこそ、なにか始められるかもしれないと感じたのだろう。結句の「絵の具を出した」という行動が、この先のさまざまな可能性を感じさせる。

- ・マーカー跡ミミズ母の名古ぼけた英和辞典から父を読み取る

父が愛用していた辞書に引かれたマーカー跡から、父の思考をたどっている。並列された「ミミズ」と「母の名」の取り合わせが少しユーモラス。「母の名」は、たとえば花の名前だろうか、などと想像がふくらみ、それを辞書で引いた「父」の愛情も感じられる。

・公園のベンチ下には酒瓶あり集団下校の歓声を聞く

ベンチ下にあるのは、夜に大人が飲んだ酒瓶だろう。残されている物から、人や時間の気配が感じられる。瓶に歓声が響いているようなイメージもあって面白い。

・中秋の名月すすきはいいけれど好きです君には言えないけれど

一見言葉遊びのようだが、言葉から心が導かれているようにも思える。読み終わってまた最初から読みたくなるリズムの心地よさがある。少しはにかんだような口調も印象深い恋の歌。

## 連作の部

・見上げれば夏

「間奏の終わりを待たずイヤホンを外した午後に風が通った」の空気感、「しってたよ言葉が全部うしろ向き わたしの口も うしろにひらく」の独特な身体感覚など、五感をとおして目の前の世界と向き合っている実感のある作品。「耳慣れぬアナウンスにも呼ばれてる気がして止まる知らない駅で」など、未来へのあこがれや、漠然とした不安がみずみずしくうたわれている。

・今世は

「血管の枝分かれした回数が生まれ変わった回数らしい」「整列で改まってるきみの背をスッとやって鮮魚に変えた朝」など、生き物にかかわるモチーフが多く、個性的な一連。読み手を楽しませようとするエンターテインメント性を感じる。また、「えんぴつは机の上で銃弾とおなじ鉛を背骨に立てた」など、日常のなかに戦争の気配を見ているような社会詠的な作品にも注目した。

・遊覧船のくちづけ

「ミルクチョコレートを包む銀紙のさわっていない場所がやぶける」からは、気がつかないうちに傷ついてしまう、あるいは傷つけてしまうという、青春時代ならではのあやうさが詠まれていて印象的。「くちづけのために遊覧船ふたつちかづいてゆきはなれていった」は、恋のイメージを感じさせ、ゆたかな詩情がある。「橘の実の黄金の曲線にこころは過去にとどまりたがる」の、「橘の実」など、語彙の選択も魅力的。